



Fig. 1 「バンダイカセットムービー ミニクル」の外観とカセット



Fig. 2 「ナガサキヤガメラムービー」の箱, キャンディー, ビューアーと内部から取り出したフィルム円板

元の口絵ページをカラー化しています

口絵解説

「画像からくり」

第6回 フィルムが組み込まれたおもちゃ：ムービービューアー

6. Toys with Transparency: Movie Viewer

桑山哲郎

エンドレスフィルムは映写フィルムの両端をつなぎ合わせ、ループとしたもので、同じ動画を繰り返し上演するために用いられる。映画の発明当時、実写あるいはアニメのフィルムは長さが短く、エンドレスフィルムとすることで繰り返し映写し、何回か映写を繰り返した後に別なフィルムを上演するといったことが行われていた。

子供向けのおもちゃには、エンドレスフィルムはたびたび登場する。Fig. 1は、1995年頃発売されていた「バンダイカセットムービー ミニクル」である。家庭用ビデオカメラを模した外観で、ムービーフィルムのビューアーと、ビデオカメラのおもちゃの2通りの遊び方ができる設計となっている。スーパー8・シングル8と同一の寸法のエンドレスフィルムが、透明なカセットに組み込まれている。写真は「超力戦隊オーレンジャー」【©1995 テレビ朝日 東映】のカセットで、小さくタイトル名が見える。

カセットを本体にセットし“PLAY”のボタンを押すと、モーター駆動の搔き落とし爪でフィルムがコマ送りされ、動画が観賞できる仕掛けになっている。8ミリフィルムのバックライト照明として、本体左側面から入射する光を用いる設計であるが、印刷されたタイトルの反射光を用いることになるのは、光学設計としては奇妙な印象を受ける。けれども実用上は問題を生じていない。またアイピースを覗き動画を観賞するわけであるが、その近くに設置されたレバーでは、視度調節の他に、接眼レンズを光路外に動かす操作も行えるようになっている。ビデオカメラのおもちゃとして遊ぶときに

は、接眼レンズを外した素通しの光学系とし、カセットは取り外す。なお、フレームの上下位置調整のレバーも備えている。1995年の発売当時、何十ものタイトルの交換用カセットが揃っていたようで、現在でも売買の対象となっている。

続いて取り上げるのは、Fig. 2の「ナガサキヤ ガメラムービー」というお菓子である。玩具菓子あるいは食玩と呼ばれるジャンルの商品で、建前上はお菓子で、付録としておもちゃが入っている。おもちゃではなく、お菓子売り場に並んでいることが販売戦略上のポイントで、子供連れの母親がおもちゃ売り場を避けようとしても、食料品売り場を歩くときに子供の手が届くように売り場に配置されている。

さてこの「ガメラムービー」【©大映、1999年発売】であるが、中に入っているのはごく一般的な子供向けのビューアーである。ビューアーの通例として、直径24mmの透明フィルムの円板が組み込まれている。この玩具菓子は、ビューアーの構造が単純で分解しやすいので、代表として取り上げた。円板には、回転軸の周りに10コマの写真が配置され、ダイヤルを回すと順次画像が入れ替わる仕掛けになっている。箱の外には映画フィルムが描かれているが、玩具菓子なので、表示と違う物が入っていたと苦情を言う消費者はいないと思われる。

玩具菓子に限らず、おもちゃのビューアーは数えきれない程の種類があると思われる。最低200台は持っていないと、とてもコレクターとは名乗れないと思う。今回自分のコレクションを数えてみたが、40を少し超える台数であった。ビューアーはほとんどが直径24mmの円板を組み込んだもので、8ミリフィルムを用いるものは3台だけである。詳細なリストを整理されている方がおられたら、教えを乞いたい。

ビューアーに組み込まれているフィルムの直径が、24mmあるいはこれ以下であるのは、量産に用いるプリンターの都合によるものと思われる。35ミリ映画を上演するためのプリンターを流用することで、24mm幅のプリントは容易に量産できる。スーパー8規格のフィルムでも、1995年当時は量産用のプリンターを用いることができたと思われるが、現在の状況は不明である。